

奨励

ヨブ記を通してみる、試練の意義 (今を生きるに試練の意義を考える)

奨励	龍城 正明【たつき・まさあき】
奨励者紹介	同志社大学文学部教授 研究開発推進副機構長
研究テーマ	選択体系機能言語学・音韻論・音声学

神は貧しい人をその貧苦を通して救い出し

苦悩の中で耳を開いてくださる。

神はあなたにも

苦難の中から出ようとする気持を与え

苦難に代えて広い所でくつろがせ

あなたのために食卓を整え

豊かな食べ物を備えてくださるのだ。

あなたが罪人の受ける刑に服するなら

裁きの正しさが保たれるだろう。

だから注意せよ

富の力に惑わされないように。

身代金が十分あるからといって

道を誤らないように。

苦難を経なければ、どんなに叫んでも

力を尽くしても、それは役に立たない。

夜をあえぎ求めるな。

人々がその場で消え去らねばならない夜を。

警戒せよ

悪い行いに顔を向けないように。

苦悩によって試されているのは

まさにこのためなのだ。

(ヨブ記 三六章一五―二一節)

はじめに

一自己紹介をかねて一

ただいまご紹介いただきました文学部の龍城でございます。文学部で教鞭をとると同時に現在、研究開発推進機構というところで先生方の研究が進むように、また学生諸君にとって先生方の研究が活かされるようなことをさせていただくお手伝いをする場所、特に今出川校地での文系学部の先生方の研究を助けるという意味で、どのようにすればわれわれが頑張っていけるかというお役に携わっております。私自身の専門は機能言語学ということで言葉の勉強をしている、ただ単に言葉、言語の分析ということよりも、言葉というものが話し手と聞き手からどう成り立っているのか、またそれを社会の相互作用という点でどのように考えていけばいいのか。まさしく言葉の持つ機能という観点から研究をし、そして学生諸君と共に考え、還元していくことをしております。

私にとってのヨブ記 現代の苦難

本日、「ヨブ記を通してみる試練の意味」と題しまして、皆様方にお話をしたいと思います。このように思い立ったのは、この二週間ほど前から日本で新型インフルエンザという病魔に侵される状態が起きたからです。その前をみていきますと日本の状況というのはよくいわれますように一〇〇年に一度の未曾有の経済危機が訪れているといわれています。失業率は四・八パーセント、さらに米国では八・五パーセントという高い失業率が世の中を嵐のように吹き荒れております。また大学生にとっては大変厳しい状況が見込まれます。それは今までの就職内定率が最低であったといわれた九九年、それに比するくらいの九年ぶりの悪化です。昨年度は九五・七パーセントであった。こういう厳しい状況が続いているわけです。

さらに世界の状況としてはもう八年ほど前になりますが、九・一一といわれた二〇〇一年、アメリカの同時多発テロ、このときには二九七三名の犠牲者の方が出ました。そして二〇〇三年二月に始まって現在まだ続いているといわれていますスーダン西部のダルフール紛争、これは二〇〇万人の死者と四〇〇万人の家を追われた者、六〇万人の難民を出したといわれています。さらには二〇〇八年五月十二日、中国では四川の大地震が起こりました。その後、二十二日の発表では死者は五万一一五一人、行方不明者が二万九三二八名、計八万人を超える犠牲者が出たといわれています。このように世界では、われわれにとって苦難といわれるような厳しい現実が毎年、毎年起こっております。こういったわれわれに課せられた逆境、これを単なる災いととらえるのか、あるいは神が与えたもうた試練ととらえるのか、これは考え方によって大きく異なるところです。どの世界にも、どの場にも、どの社会にも常に苦難や苦勞、これがつきまといます。それをどのようにして克服していかなければならないのかということ、それを本日は旧約聖書の「ヨブ記」にあるヨブの生き方を通して、皆さんとともに考えていきたいと思います。

ご存じのとおり、同志社大学はその教育理念と建学の精神として、自由主義・国際主義、またキリスト教主義という三つの柱を立てております。私自身は仏教徒でして、キリスト教とは関係はございません。しかし、同志社大学でミッションスクールということではなく、キリスト教主義という名のもとにキリスト教のいかなるものであるかということ学んだこと、これは私自身の生きざまのなかで、生きていくうえで大きな糧になっていることは確かです。今日、お話しする「ヨブ記」、実は私が英文学科の学生のとき、「キリスト教文学」というタイトルのもとで行われた講義のなかで、この「ヨブ記」を読みました。それ以来、常に何らかの苦難に遭遇したとき、このことを思い出しながら私は生きてきたといっても過言ではありません。そのようなことから、「ヨブ記」を紹介してもらい、私に「ヨブ記」というもののもつ意義を知らしめていただいた同志社大学のキリスト教主義という教育に感謝をしつつ、今日はお話をしたいと考えております。ここにご列席の方々は多分、キリスト教徒、またはキリスト教に深いご理解をお示しの方なので「ヨブ記」についても粗筋は釈迦に説法かもしれませんが、「ヨブ記」というものがどういうものであるのか、簡単に説明をして、その後、私が思うところをお話しさせていただきます。

ヨブの災難

「ヨブ記」というのは対話、劇作品ではないといわれていますが、「キリスト教文学」で遭遇したように、明らかに他の聖書とは違い、その中には筋の展開があるので、一つの作品と見られております。そしてこの作品は第一部が序曲、第二部が展開部、第三部が終局というような三部構成からなる作品として知られております。まず序章においてヨブという主人公が紹介されますが、これは聖書では「ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。」というこの一節から始まります。即ち、ヨブという人はヤハウェ、即ち神の目にかなう義人であり、神によって特別の祝福をされていた人、その当時は何の苦難も問題もなく裕福で幸せに暮らしていた人でした。ところが、このヨブに対して天上界では、神は、サタンとのやりとりの結果、サタンにヨブに打撃を与えるということをお許しになります。「ヨブ記」におけるサタンというのは神に敵対する悪魔というのではなくて、神に仕え、人間の地上における行状を調査する檢察官的な役目を果たしている立場のものであったと伝えております。

そしてこの義人、また神をおそれるヨブに対して、サタンは一度目の過酷な打撃を与えます。それはある日突然、家畜、財産すべてを略奪者の襲撃と神の火、即ち雷をもってすべてを奪い去ってしまうのです。さらには子どもたちが一人残らず大風による建物倒壊の犠牲となって死んでしまう。こういう悲惨な境遇を与えることになるわけです。しかし、一度目の過酷な打撃に対してヨブは自分に与えたもうた神、そして自分からまた奪った神を讃えて、決して動じませんでした。当然、神は「やはりヨブはこれだけの義人だから、それくらいのことでは動じないだろう」とサタンにおっしゃいます。しかしサタンは「いやいや、これくらいのことでは動じようではヨブもたいしたことはないでしょう。もう一度打撃を与えれば多分、ヨブはあなたを憎み、そして呪うかもしれません」と言うのです。

そこで神はそれでは再度、という形でサタンをお許しになり、二度目の苦難はヨブ自身に与えられます。それはヨブの皮膚を破り、悪性の出来物で覆います。この悪性の出来物で覆うということこそ神の呪いの象徴的な具現だといわれているわけです。したがって、ヨブは家の外に出て、座って、灰を被り、そして陶器の破片で身を掻くという悲惨な事態を七日間続けることとなります。それでもヨブはまだ神に対しては何とか崇めようと思いますが、やはりヨブも人間である以上、限界がきてしまいます。

ヨブの嘆き

そこで東国のヨブの友人三人が、ヨブを慰めるために彼のもとを訪れます。その友人たちがヨブに対して、「苦難というのは無自覚であっても、実際に罪を犯したのに対する神の強制手段である」というふうに諭すのです。即ちヨブは義人であって何もしていないのに罪を受けるはずがない。多分、ヨブ自身が罪を犯していないというならば、「ヨブの子どもたちが何らかの罪を犯しているのではなからうか。そして結果、ヨブ自身も社会的な重罪を犯しているのではなからうか、ヨブの子どもたち、ヨブ自身が罪を犯したのに、ヨブは、ただそれに気がついていないだけだ」というような諭し方をします。これに対してヨブとこの三人の友人たちの討論が三回にわたって展開されるわけですが、結局、ヨブは友人たちの発言に対して、真の対話の相手であるのは神であると、ヨブは、彼の頭のなかに広がる神に対する自由、また神への挑戦とも思える言葉を吐いて、なかなか友人たちの説得には屈しないということをやっているのです。

その結果、ヨブは神と語りうるものは神以外にはない。それなら自分が生きているうちには実現しない、したがって、人間は死ぬべきだ。しかし、人間が死ぬのだからといって神と交流することなどありうるはずがない。その意味でヨブが口にした神への期待、これは実現不可能な可能性であると知ります。とすれば、友人たちの言葉と同様に神をおそれ、神の来臨を期待する、そういうことも虚しくなってしまうわけです。そこで真の解決は神のもとにしかないと、ヨブは決心も新たに神のもとを求めて長い独白を行います。その際、ヨブは自分の人生を総括し、神から祝福された過去の幸せな生活を回顧し、また富と名声に恵まれ、人びとの尊敬を集めた、そういうことを思いだし、今、自分の苦難に見舞われ、それらすべてが奪われてしまった状態を嘆きます。これが有名な「ヨブの嘆き」といわれている聖書の箇所であるわけです。

この段階で過去のことを思う、また現在と対極とされた、この思想というものは、これは神が過去と現在では正反対に行動して、ヨブとかかわりを転化した、そういう状況を問い詰めようとするヨブの執念が表されている箇所であるとも理解されております。このように祝福から呪いへと転換されてしまった神の事実こそ、これがヨブの神に対する行為の根拠となっているわけです。

エリフの弁論

こういう状況をいたたまれなくなったヨブ、また三人の友人のなかで、一番若年であるエリフという者が、ここで現れます。エリフはヨブが神よりも自分の方が正しい、そう主張することにに対して怒りを覚え、またヨブに太刀打ちできない友人たちを不甲斐ないと判断し、ヨブに対してエリフは弁論を開始するわけです。即ちエリフにとって苦しみは神が人間の目を啓くための必須の教育手段であることは間違いない。死の淵にまで追いやられた人間の神の懲らしめに文句をいわずに耐え、自分の思い違いを悟って悔い入るならば、仲裁者である天使がそれを彼の償いとして神に差し出し、死神の手から救われる。当然、神は不法であるなどと訴えるのは一人相撲であり、彼の憤りをとりあげるものはいない。にもかかわらず、それがわからず、神が不当だというヨブは罪を重ねている。即ち自分は正しい、そして正しいのにそういう仕打ちを受けている。それをしたのは神であるというふうに自分の主張を曲げず、自分の罪を罪とは思わないヨブ、これは永久に試練を受け続けるべきだと言うわけです。

神の語りとヨブへの質問

そういった状況のもとに遂に神が姿を現し、そしてヨブに語りかけます。語りかけるというよりも神がヨブについていろいろ質問をなさるわけです。たとえば神が創造した社会の世界、この不思議な仕組みについて問われます。また原始怪獣といわれるベヘモット、これはカバの原型だと。またリビアタン、これはナイルワニの原型だといわれますが、このような恐ろしい怪獣を捕獲することができるか。いろいろと難題をもって神が弁論をされるわけです。当然、このような神がつくりだした世界に対して一粒の人間であるヨブは答えるすべも知りません。したがって、ヨブは神に向かって「誠に私は小さいものです。あなたに何と返答できません。私は我が手を口に置くだけです。私は一度語りましたが、答えることはできません。二度語りましたが、これ以上応ぜません」と考えられる限り、最短で、内容的に何も言っていないかのような返答をして神に対峙することになります。その結果、ヨブは自分の無知とそして神を呪ったという罪を悔い入ることになるわけです。結果、神もヨブを攻撃するというのではなく、ヨブは神への疑いを込めた嘆きと攻撃の言葉をすべて撤回します。

エリフのヨブの苦難に対する回答

このように物語が終わってしまいますと、ただヨブが苦難のなかで神に頭を下げて悲壮な決心を表明した、結局、義人であったヨブは神を呪うが、呪うということは意味なく神の出現によって打ちのめされ、そして神がヨブを救うという単なる物語で終わってしまうかもしれません。こういう結末でいいのかどうかということ。これは神としてはヨブに対して行った罪に対してきちっとした始末をつけないでいいのかどうかということを考えてみましょう。神は悲劇の主人公としてヨブを見捨ててしまうことはない。即ちここでの問題点は、罪ということなしに苦難はありえない。そして友人たちもヨブの苦難という意味を認める以上、ヨブの罪を検証するという責任を負う。またエリフによれば、罪を犯していない義人であっても自分の義を神は省みくださるはずだという思い込みにとられる人がいる限り、神に対する重い罪を犯しているのであり、神が厳しく処罰されるということ、これを分らせるということ、即ち義人であるといえども思い込みの罪を悔い改めない限り、処罰されることもありうるということなのです。

ヨブ記から学ぶべきこと

このことは今のわれわれにとっても考えさせられる、大変重要なことではなからうかと思えます。同志社大学の多くの学生諸君というのは裕福で、かつそんなに苦労もなくこの大学まで就学されてきたのではなからうかと思えます。もちろん中には苦労をしてアルバイトしながら同志社大学に通っておられる学生諸君もいらっしゃるでしょうが、多くの学生さんたちは幸福な環境で勉強していただいています。最初に申しましたいろいろな世界で起こっている苦難、そして就職率の低下、内定率の低下というものが恵まれた環境で育ってきた学生諸君にとってどういうふうに目に映るのか。何の苦労もなしに生活してきた学生諸君、こんな境遇であったから私はこの生きる時代、こういう巡り合わせになるのではなからうかと思うわけです。今の自分の境遇があるかもしよぬ事態が起こるといことは、即ちヨブの場合は神に従い、敬い、義人であると自負している余りに苦難の自分をつくった神を呪う、そしてこれは実は人間のホンネであるかもしよぬ事態。

しかし苦難というのは罪を犯したから受けるものではないのです。即ち何の苦労もなしに、そして何の問題もなく過ごしてきた人だから、同志社大学に入れれば問題なくいい就職ができて、いい結婚ができて、社会にも出られるということではないかもしよぬ。これはこの「ヨブ記」というものを通して、正しい行いをしてきたものは決して死ぬまで正しい道を行けるということではないということを知るべきだと思えます。

反対にそういうことも自分たちが分かりさえすれば、即ち今の境遇を決して嘆かず、また決して恨まず、ましてや神を呪うということもしない限り、神は必ずそれを見ていらっしゃる。今ある苦難、それを神が与えたもうた試練として敬虔に受け止めるならば、われわれの今あるこのすさんだ、一〇〇年に一度という未曾有の経済危機も必ず乗り越える時期が来ると思えます。それは来年年なのか、三年先なのか、五年先なのか、神のみぞが知ることではありますが、それまでいかにわれわれが対処できるか。その対処にわれわれが力強く生きていくことを忘れてはだめだと考えます。

苦難の意義とは

本日、朗読いただいた聖書の中の言葉に「神は貧しい人をその貧富を通して救い出し、苦悩の中で耳を開いてくださる」という言葉がありました。また「苦難を経なければ、どんなに叫んでも力を尽くしても、それは役に立たない」という言葉もありました。特に「神は苦難の中で耳を開いてくださる」という言葉はエリフにおける苦難に対しての教育的な意義を最も端的に表す発言であるといわれております。要はエリフにおける神というのは、当然、超越的であり、間接的な手段で人間に警告を与え、苦しみによって広がる思い違いを懺悔すれば天使の仲裁を介して死から人を救う。人の苦難はその救済のプロセスに組み込まれていく。人の苦難というのはその救済のプロセスのなかに組み込まれていくという、この大切なことを忘れないように、これからわれわれは生活をし、また同志社での学園生活を送っていただきたいというふうに思います。

おわりに一苦難とは試練である

一九九五年一月十七日には阪神淡路大震災という大きな地震が起こりました。私は芦屋から通っており、私の家も大きな被害を受けました。家こそ潰れませんでした。家の中はオモチャ箱をひっくり返したような大変な事態になり、それが修復されるまでには約半年近くかかりました。確かに、芦屋の町もまた神戸の町も大変打撃を受けましたが、今や神戸の町も賑わい、芦屋の町も都市開発が進み、区画整理ができて以前にましてすばらしい町として、町並みを取り返しました。芦屋川の桜も打撃を受けましたが、桜はその次の年から満開に咲き誇りました。

いかなる打撃も苦難も、そういうものをわれわれは苦難ととらえず、一つのプロセスであり、そしてそれが試練であるととらえる、次の新しい状態に向かっていけますように。これから同志社人としてキリスト教主義というもののが何であるのか、こういったキリスト教主義を通して語られ、かつまた教えられた聖書の一章、一節を胸に刻みながらこれからの未来に雄々しく立ち向かっていける同志社の学生、教職員の皆さまに神の祝福がありますように祈って、私の本日の奨励とさせていただきます。どうもありがとうございました。